

「集落青年会」の実相とその意味

——戦後青年集団史研究の課題およびライフ・ヒストリー法の可能性——

安藤 耕 己

1. はじめに

従来の社会教育研究では、戦後の地域青年団⁽¹⁾の活動がやくざ踊り⁽²⁾などを催す演芸会の流行に始まり、それへの批判と反省を経て、以後昭和20年代半ばから30年代半ばにかけて、自主的な学習活動、青年学級の自発的な発達・展開を見たときされてきた。そして昭和28年に提出される青年学級法制化案への反対運動の盛り上がりの中、共同学習論が提唱され、各地で導入されていった。しかし、高度経済成長期を迎え、産業構造の変化および都市への青年人口の流入もあり、農村青年の学習活動も地域青年団も衰退していく、という構図で説明されてきた⁽³⁾。しかし、この通説に関しては、例えば筆者の調査地域である岩手県に限ってみても、昭和20年代に消滅するとされる演芸会がそれ以降も残っていくこと、演芸会と青年演劇や生活記録運動が併存していた実態が報告されている⁽⁴⁾。これらの事例をみると、従来の通説では、なぜやくざ踊りが残り続けていくかが説明できないのである。

このような矛盾が出てきたのは、社会教育学での戦後初期から高度経済成長期にさしかかる昭和30年代半ばまでの青年集団のとらえ方とその視点・方法に以下のような問題があったためと思われる。それには①戦後の集落単位の青年集団の実態が不明確、②その結合原理と機能に関する表層的な理解、③青年集団の存立基盤である地域特性の軽視、④当事者の視点がない、特に学習者の生活史上の学習や活動の長期的な意味が問われていない、という4点が挙げられる。このうち、②③に関しては当事者の視点の重視という観点においては相互に関連性を持つといえる。

以下本稿ではまず社会教育においては戦後の青年集団、特に農村における青年集団の存立基盤とその結合原理をどのようにとらえられてきたのかを考察し、それをふまえて従来の研究の問題点を克服する方法論を提示し、その有効性を検討することにした。具体的には筆者調査による岩手県花巻市の水田単作地帯の集

落青年会のモノグラフにおける事例を通して、集落青年会の結合の原理をライフ・ヒストリー法を用いて仮説提示を試みたい。

2. 戦後青年集団史研究の動向

これまでの社会教育学での前提を振り返ると、戦後復活した地域青年団に関しては、市町村単位の組織での学習活動への自主的な取り組みや、自己教育運動としてとらえられるものに主眼が寄せられており、集落単位の団、集落青年会の活動の実態にはほとんど注目していない経緯がある。

以下、社会教育学でなぜ集落青年会の活動を捨象してきたのか、それを戦後社会教育史研究の体系的研究が始まった1960年代前半を中心に概観してみたい⁽⁵⁾。

(1) 地域青年団の非歴史的理解

戦後社会教育における青年期教育研究の中心的な存在であった小川利夫は、1960年代初めに以下のような前提を示していく。つまり、部落青年団の結合原理が、「素朴な結合要求」であるとする茨城県鉾田町の実践家山口武秀〔1960〕⁽⁶⁾の着目を評価しつつも、「青年団運動の特殊性⁽⁷⁾を「青年の素朴な結合要求」のみに求める氏の見解は、非歴史的だといえよう(傍点原文)」と批判している。さらに小川は、山口が「青年団組織の基礎は部落だといまなお固定的にとらえている」ことについても批判する⁽⁸⁾。そして、戦前に編成された青年団はそもそも市町村単位で組織されたもので、「その基本的な組織原則は、もはや部落ではなく新しい市町村や県・国家の青年としようとした点に求められる」とした⁽⁹⁾。これは山口と小川の青年団の組織基盤の認識に大きな差異があったことを示している。

つまり、山口はあくまでも「戦後」の集落の日常態における「集落青年会」の結合原理を「素朴な結合要求」として見ているのである。それに対して、小川は戦前、青年の「素朴な結合要求」が体制に利用され、

体制支配の官製青年団化が進展していったことと執筆当時の現状を重ねて危惧しているのである。

このような小川の見解に比して、社会教育関係職員・青年団運動の実践家からは異なる視点が提示されていた。たとえば、山形県教育研究所所長補佐であった佐藤信一（1958）は、集落包括的な青年会を基盤に置きつつも、その中で機能分化がなされていき、小集団が形成されていくことを指摘した。そしてその中には単に集って話に興じるような未組織的な集団の存在を重視し、それらが「青年たちにとっては何等かの意味において人間形成機能の役割を果たしている⁽¹⁰⁾」と評価した。そして青年学級には、それらの小集団の意志をもくみ取っていくことの必要性を重視し、「素朴な単純な形態において地域青年ひとりひとりの生活の願いをくみとって、それを学習活動にまで組織化していくことを考えるべきであろう⁽¹¹⁾」と、青年学級の学習内容の硬直化に現場からの視点を提示した。

同じく山形県出身の青年団指導者で日青協の中核にもあった寒河江善秋（1959）は、青年団とは、もともと地域社会を組織の基盤とした、多様な青年層を包含する大衆組織であって、ある面甚だ曖昧で頼りない存在とするが、集落の身辺にある日常の暮らしの矛盾や不合理に取り組んで、少しでも解決しようとするのに集落の青年団が「大衆的な前衛組織」として貢献するとする。そして寒河江は行政がその結合原理としての娯楽性を否定したり、日青協の運動方針が現実の農村青年の日常とかけ離れていることを批判した⁽¹²⁾。

そもそも、実態に精通している研究者・実践家の立場から見ると、戦前期からの青年団組織はもちろんのこと、戦後において再組織化された市町村単位の青年団体は、集落青年会の代表者の組織の面が強く、いわば建前のものであったといえる。むしろ青年の日常と密接な関係があったのは集落青年会であり、かつその活動に大多数の青年の結合要求が表出していると思われるべきであろう。

小川の見解は、大正期における官製化の過程で成立してきた青年団組織と、戦後の「新生」青年団が同様の組織原理をもって結合していったと見なしたものであり、その単位団としての集落青年会は否定される存在として見ていたものである。ここに青年の日常態における集落青年会の意義への視点の欠如が浮き彫りになっているといえよう。また、地方改良運動、経済更正運動、戦時下での部落会・常会の設立などの官製的村づくり運動、戦後での新生活運動などでは、常に集落（大字）単位の自助努力、隣保精神の高揚が求めら

れ、集落の意識・紐帯が顕在化させられてきたという歴史的視点も小川の見解には欠けているといえる。従って、小川の集落青年会否定の見解こそかえって「非歴史的」であるといえるのである。

(2) 「たまり場・居場所」論

この一方で、大田堯が「ロハ台」との関わりから青年集団の結合原理として「たまり場」的機能を早くから評価しており、特に大田は、集落青年会と集落青年学級の実態に着目している。しかしもちろん、その実態を単純に肯定しているのではない。

「しかし、たまり場は、一方からいうと、あくまで行き止まりのたまり場でした。⁽¹³⁾」と不満を解消するだけで終わってしまうことを大田は批判し、そして、たまり場を村のサークルの前史ととらえ、「サークルも、このたまり場の前史にしっかり根をおろすのではなければ、単なる“はやり”の一種として、やがて大した役割もはたさずに、日本文化史の衣がえの一コマに位置づけられるにとどまるのではないかと思います。⁽¹⁴⁾」と、単なるたまり場からそこから学習活動への取り組みを期待した。

また、横山敏（1978）⁽¹⁵⁾は戦後初期の宮城県南郷村の集落青年会の学習の取り組みの多様性と、その中の小集団の出現に着目し、その「学習内容」と「学習主体」としての青年集団の形成を評価した。そして集落青年会の実態は「たまり場」であり、息抜きの場として評価できるが、現実の問題や社会矛盾を直視できるものではなく、集落青年会での学習活動の停滞化が必然的にもたらされることを示した。

社会教育施設における「たまり場」論は、寺中作雄の初期公民館構想⁽¹⁶⁾以降、公民館の「たまり場」的な機能の主張と評価がなされてきている。80年代には長浜功⁽¹⁷⁾が大田堯論を評価しつつ、社会教育施設における「広場とたまり場」の意義を訴え、以後現実の社会教育実践の中で青少年の「たまり場」・「居場所」づくりが論じられてきている⁽¹⁸⁾。

(3) 地域特性への視点の欠如

昭和30年代の東大社会教育研究室では、共同で精力的にモノグラフ調査に取り組み、『東京大学教育学部紀要』第4巻〔1959〕において「長野県中野市科野地区における青年の学習活動」、「島村における青年・婦人の学習活動」を世に示し、以後の社会教育での市町村単位という「地域」スケールの前提を構築していったといえる。それ以後では、社会教育学では伝統的村落

のモノグラフ的調査が後述する佐藤守〔1969〕⁽¹⁹⁾・江馬成也〔1971〕⁽²⁰⁾などの社会学プロパー以外からはほとんど見られず、この世代の研究者の前提と見解を、後の世代が踏襲していったことが推測される。

また、青年学級も市町村単位での開設であり、社会教育の行政（の財政的）支援があくまでも市町村単位で行われる前提もあり、研究者の視点も市町村単位での青年集団やサークルによって行われた学習活動や青年学級、公民館活動等に寄せられ、かつ評価していったものと思われる。また、先に挙げた小川の主張も市町村合併を眼前にして、封建遺制そのものとしてムラ社会を否定し、新たな市町村に青年教育、ひいては社会教育の興隆を期待したゆえともいえよう。

これらの市町村単位という前提の流れの中で、佐藤守は『近代日本青年集団史研究』（1969お茶の水書房）を公刊した。佐藤の研究の主眼は、資本主義の展開過程の中で伝統的青年集団の変容・青年会への再編成の過程への注目にあったが、綿密な構造・機能主義的アプローチで全国にわたって集落のモノグラフ的調査を行った。そして集落青年会の存立基盤と形態を主に入会地維持とその集落内の階層の存在等の規定を加味しつつ、分類した。江馬成也は「山村社会の変容と若者組織—『鋤柄講契約』の事例を通して—」（1971）（村落社会研究会編『村落社会研究』7 塙書房）において佐藤と同様の視点と方法で青壮年組織である契約会の変容過程を宮城県の集落で分析した。

ここでも導き出されるのが、市町村単位での青年組織と集落単位の青年集団の関係の形態の多様性であり、佐藤信一も前掲書〔1958〕で山形県における集落青年会の若者組との連続性と断絶に着目して、存立形態の類型提示も行っている。これらの見解からも小川の市町村青年団のみへの着目は実態を把握しているとはいえない。これによって青年集団の動向と運動の実態を検討するに当たり、市町村単位の活動のみをみることは、甚だ表層的であるといえよう。

(4) 集落青年会の実相理解

また、なぜ「やくざ踊り」の時代の集落青年会の実相が不明確であるか、という点に関して別の角度から考えてみたい。

1960年代以降に社会教育史の概説を書いていく研究者にとっては、「やくざ踊り」の流行はかつての眼前の事実であり、自明のことであった。それがゆえに、「やくざ踊り」についての説明もする必要がなかった。また、それを否定し、自主的な学習活動・自己教育運動

の展開を評価し、啓蒙する教育的意図からもその終戦直後からの集落青年会の実態を正確にとらえることがなかったことが推測される⁽²¹⁾。

そこで、この「やくざ踊り」と素人芝居等に関しての実相に関して他分野の知見を援用してみたい。終戦直後から社会教育行政からの現状報告等にやくざ踊りの実施状況が散見されるが、その詳細な実態と当事者の観点がうかがわれるものには、「やくざ踊り」〔1978〕⁽²²⁾があり、また流行歌分析からもその流行の諸相と起源に関してがうかがい知られる⁽²³⁾。

これらの報告を受けつつ、北河賢三が『戦後の出発文化運動・青年団・戦争未亡人』（2001）において、全国的な隆盛の諸相と、その状況への「大人」からの批判の目と青年の中での肯定と批判の議論を浮き上がらせている。地域特性を考慮しない資料提示が目立つが、これがはじめて戦後史に農村のやくざ踊りの時期を意味づけていった点が評価される。しかし、終戦直後という設定年代の制約もあり、その後のやくざ踊りと地域青年団との関係の推移は検討されていない。

民俗学においても若者組⁽²⁴⁾以来の青年集団は、民俗学草創期以来の重要な研究対象であった。戦後に膨大な報告・民俗誌を蓄積させているが、あくまでも関心は、近世来の伝統的青年集団の機能・組織の原型遡源と類型化、そして近代から戦時下における国家による改組統合の過程に関心が寄せられているため、戦後の状況現状についての報告はあくまでも補助的であり、具体的な記述はほとんど見受けられない⁽²⁵⁾。

また、高橋統一らによる社会人類学による年齢階梯制の視点における若者組研究も民俗学と同様に機能の原型遡源と類型化に主眼があるといえる⁽²⁶⁾。

しかし、社会教育史のみならず、関連領域に関してみても、終戦直後から高度経済成長期にさしかかるまでの集落青年会の実相は十分にとらえられていない。

(5) 小括

ここで小括すれば、従来の社会教育研究では、終戦直後の農村青年集団の実態に正面に向き合っておらず、市町村単位での青年集団の活動、そしてサークル活動等に注目してきた結果、そこでとらえられてきた農村青年の志向は表層的であったといえる。これまでの研究では、日常生活における集落青年会の意味、あるいは「やくざ踊り」の流行の意味、その消滅と学習活動との併存などの意味をとらえ切れていない。また、他分野においても終戦直後から昭和30年代の農村青年の実相を正確にとらえてきたとはいえない。

これらの課題を明らかにしていくためには、やはり当事者の視点とその集落青年会のおかれた地域特性の理解をする必要があるといえよう。その際に有効なのは、当事者の口述および、生活記録、日記等を用いた社会史的アプローチであり、かつ特に個人の口述に焦点化したライフ・ヒストリーを用いることにより、当事者の意味づけ、および当事者の人間形成における青年会の意味を読みとっていくことができると考える。拙稿〔2001〕において、日本における村落研究におけるライフ・ヒストリーの導入の過程とその意義に関しては既に論じてきた⁽²⁷⁾。そのため本稿では特にライフ・ヒストリー法の方法的検討は行わないが、個人の主観的世界にアプローチする方法として、個人の日常態を明らかにする方法として、そして歴史的事実の改変性の可能性を持つものとして評価してきた。

それでは以下、筆者調査の岩手県花巻市の水田単作地帯にある柵目集落の事例⁽²⁸⁾をもとに、終戦直後から昭和30年代までの集落青年会活動の実相と、当事者の日常生活における集落青年会の意味を明らかにしていきたい。

3. 集落青年会の実相とその意味

——ライフ・ヒストリー法を用いて——

(1) 調査地概要

調査地の柵目集落は、岩手県中央部の盆地にある花巻市西部に立地し、現戸数は約110戸。全戸数の半数以上が非農家となっている。集落内を主要県道が交差し、かつて電鉄の駅が設置されるなど交通の要衝であった。また、鎌倉時代以来の開村伝承を持つ集落で、現在の集落域はほぼ藩政村の柵目村と一致し、昭和29〔1954〕年の市制施行により花巻市に属する。

同族組織としては6つの姓がマキを構成している。ツキアイを見ると系譜的に最も古いある姓が集落の各マキのオオヤ（本家）の大本家として頂点に立っている。特に集落の相談役職は、各姓の本家株の家によって占められている。現在でも祭礼などの際の戸主の座順には本分家の位置が顕在化する。

(2) 柵目青年会

近世期には若連中の明確な規約等を持った組織は存在していないと思われる。その中で山の神塔（党）が青壮年型組織として類推される⁽²⁹⁾。

湯本村青年団結成（明治43年）の成立期に分団として「柵目青年会」の名が見える⁽³⁰⁾が、以後は湯本村青年団の分団として存在し、大日本青少年団の解散ととも

に消滅した。

戦後の柵目青年会は、終戦直後⁽³¹⁾に神社脇に、復員した青年を中心に青年会館（現公民館）を建設することでその活動を顕在化させた。そしてその主な活動は、演芸会の主催と運動会への参加、そして夜間の「常会」と銘打っての集会であり、いわば娯楽集団としてその結合を見せた。

会長以下の1年改選の役職も存在し、15歳から30歳程度、原則として未婚の男女が加入できた。集落からの援助と、田打ち請負や演芸会での「お花」を主要な財源としていた。

(3) 青年会の実相

演芸会の練習に関しては、以下の描写にうかがわれる⁽³²⁾。

ガラんとした集会場の片隅で、すりへったレコードがなり出す。「おう K はいねえか」と演芸部長がいう。今までしきりと女同志の話に横から滑稽な相槌を打って笑わせていた K は、最後にまたひとしきり笑わせて立ち上がり、「刀はねえか？ 刀は」と云ってあたりを見廻す。誰かマ黒い漆塗りの優勝旗の柄を投げてやる。それをとって K は最初からレコードをかけて踊り出す。次郎長旅しぐれ。センチで悲壮なメロディに合わせて K は、指先をしなわし、その指先を真剣に見やり、肩をいからせて歩き、そして優勝旗の柄の刀を頭から左右に振り廻し、メロディがなり終わるところで急にみんなの方向に向け、にがみ走った表情をつくってすごみをきかせる。

「うめえぞ」「すげえ」見ているみんなはそんな声をかける。——

そして又次のレコードがなり出す。

青年会で祭りにやる演芸会の練習なのである。毎晩九時頃からこの集会場に集って、十二時頃までも一時までも、踊りの練習をやり、そのかたわらでしきりにしゃべり、笑い、果ては取っ組み合いをしているのだ。それが一ヵ月以上もつづく。人一倍好きなある者など、目がひっこみ頭がグルグルすると云って、ガンガン騒いでいる中で、いびきをかいて眠っている。祭りが近づくと、一台の蓄音機では足りなくて、自分の家を持って来て、庭で、月明かりを頼りに二、三人やっているものもある。（A氏報告）

これは柵目青年会の昭和30年頃の演芸会の練習の風景である。報告者のA氏は、このやくざ踊りを批判す

月日	行事・活動
1月23日	○旧正演芸会と劇発表会を持つこと ○貸本文庫配本【筆者註：上記をを議題とした集会開催か】
1月25日	○ピンポン大会予選 ○夜、新年宴会
2月12日	○演芸会開催（柵目小学校）
2月26日	○演芸会（湯口）
3月17日	○青年学級（柵目学校） 大牟羅良「農村の生活について」
3月26日	○入団式
4月24日	○運動会 男女とも第三位
4月27日	○田打ち（個人宅）
4月29日	○花見 38人 盛岡一人二三〇円
5月1日	○田打ち（個人宅）
5月3日	○田打ち（個人宅）
6月22日	○女子副会長選出 ○市青連理事選出
7月10日	○野球大会（湯青協）
8月15日	○盆踊り（婦人会共催）
8月17日	○友好大会（湯口） ○参加者 四名
8月19日	
8月26日	○歌と踊りの会
9月12日	○演芸会 花一六〇〇円
9月13日	○演芸会（柵目学校） 鬼剣舞と合同
14日	○慰労会
11月16日	○いものこ食い
12月16日	○常会 クリスマスのこと とき十二月二四夜 贈物一人五〇円以上 ツリーをかざる写真をとる
12月24日	クリスマス会
12月30日	○総会

【表1】昭和30年度柵目青年会の年間活動
（昭和30年度柵目青年会誌「つどい」より作成）

る立場にあったため、この文章では逆に冷静に状況がとらえられているといえる。

昭和20年代後半から柵目青年会が郡（後に市）青年団体協議会中の単位団として改組されていく中で、青年運動が導入されていく。具体的には、集落青年会の上部組織である旧湯本村青年団体協議会において生活記録運動が盛んとなる。

しかし、柵目集落青年会では上掲の【表1】にあるように、娯楽事業と資金調達のための田打ち・演芸会等が農閑期に企画されているのが活動の中心であり、また日々の常会・農休日の集会も、下記の作文にある

ような状況であった。（以下下線筆者）

「常会」 S.T子
 今日も常会か……と私の口からため息が出る。
いつもおきまりの常会……相談がすむとすぐに世間話に夢中になる。あの世間話にひまを費やさずもうちょっと別な方法がないものでしょうか。
例えばみんなの知っている歌を合唱してもいいでしょうし、「未来」について話し合ってもいいと思います⁽³³⁾。

「青年会に入って」 O.T子
 私は青年会に入るとき、何の目的も持っていなかった。ただ漠然と入会してみたいと思った。しかし少なくとも何等かの知識は得られるだろうとは思った。入会してから今日までのことを振り返ってみると、花見や川のカッパライは楽しい思い出のひとつだ、青年会の目的はやはり会合にあると思う。今までの会合中私は3回ほど欠席したと思うが会合の日がちかづくと皆に逢えるというのがなにより楽しみである。しかし、会合のたびに思うのは、柵目青年会として何の活動もしていないということです。会長さんから市青連催し等の話があるだけで、あとはバカ騒ぎで解散、これでは青年会が何のためにあるか全く無意味だと思う。もう少し青年らしい誇りをもって青年会という機関を有効に活動していきたいと思う。⁽³⁴⁾

これらは現状を憂いる声であるが、逆に当時の常会や集会の様子がうかがわれる。

同時期には集落青年会内に舞踊団も結成され、踊りに代表される娯楽を主眼とした活動を推進する派と、それを否定し湯本村青年団で生活記録文集を中心になって編集していたA氏を中心とした、学習活動をすすめようとする派が対立する。以下の【つどい】所収の作文に舞踊団の中心であったB氏の作文には、その「らんとう（乱闘）」の状況が表れている。

「演劇をやろう！」

青年会の皆様、此度は誠に申し訳ありません。此の若き青年の皆の夢と希望をかなえたいと盛上がったままでした。

一九五五年のらんとうを水に流して、一九五六年を、あのようなことのないようにほがらかにやりましょう。

希望、希望をすてるな。

集会もおもしろく、皆んなで語り合い、楽しい青

年活動を盛んにいたしましょう。正集会の前後をしっかりとお願いします。クリスマスも、楽しくすごして、とてもおもしろくやりました。いよいよ今年の最後の集会を飾る総会もやって来ました。一番大事な日なのです。

一年の計は元旦にありとゆうが私は来年、一年の計は此の総会に有るように思います。

皆さんよく胸に手をあてて考えて見ましょう。柵目青年会をおたがいに明るく楽しくやって行くにはどのようなことをしたらいいでしょう。私はまず、何んとか此の二三年前から口にしていた演劇を皆さんの力で実行したらいいと思います。劇についてはなにも知つていませんが演劇をやりたいものだと私は心から思っています。皆さんにも演劇をおすすめしたいと思います。

芸、芸、芸を身につけましょう。

青年会の皆様、青年活動はまず演劇からやって行きましょう。 B氏(本名記載)

また、同じ「つどい」には「らんとうに始まりらんとうに終わった青年会」と題して、やはり青年会内の対立が示されている。

その両者の「妥協点」が、昭和30年代前半に取り組んだこの青年演劇であったと解釈される。それは結局、演劇に取り組んだメンバーが、先に解散を決めた舞踊団と、柵目で傳承されていた田植踊りの幕間に行う狂言芝居に出ているメンバーが主であったこと、そして、B氏の作文中の下線部「芸、芸、芸を身につけましょう」にあるように、青年演劇は彼らにとっては「芸」の延長と認識されていたことがうかがわれるからである。

これは青年演劇の指導者の認識、たとえば昭和30年代に県の青年運動の中心的理論家となっていた県社会教育主事池野正明⁽²⁹⁾の「一つには人間改造劇であり、一つには地域(社会)改造劇」であり、「人間の質をかえるためには、青年演劇共同学習を必要とする」⁽³⁰⁾といった「お堅い」見解とはまた別の志向性をもっていたといえよう。また、当然、生活記録を通して農村と農村青年の直面する問題に取り組んでいたA氏の志向とも必ずしもかみ合っていないといえよう。

そして昭和30年代半ばを境に、柵目では青年会員も減少し、目立った活動が減少した。結果として昭和40年代半ばには一度会自体が消滅した。数年後に復活したが、その主な活動は神社の祭礼の運営、盆踊りの運営、スポーツ大会の実施等であった。結果として平成3年に集落青年会も消滅した。

(4) 当事者にとっての青年会

それでは、当事者の青年たちは集落青年会に何を求めて集まっていたのであろうか。以下の事例を示したい。

【事例1】 Cさん(昭和13年生・女性)

昭和28年、中学校卒業後に柵目の青年会に入会し、昭和32年に結婚退会した。同級のDさんと組んで、「若盛舞踊団」で踊りを披露した。農閑期には花巻の町にDさんと洋裁を習いに行つては、映画を見るのを楽しみにしていた少女であった。(――は筆者、以下同じ)

――花見ってのは、これはみんなで…、

そうです。で、あの頃、あんまりほらあ、乗用車で、マイカーなんちゆうものもなかったものですから、バス貸し切りでね。あと、電車に乗って、盛岡あたりだと汽車に乗ったりしてね。結構、それも楽しみの1つで、春はお花見とかなんとかして、そしてその、お花見するにやっぱり、いくらかでもあろう、足しになるように、朝、1時間が2時間くらいね。あろう、ほら、農業で、今みたいに機械で田圃掘るわけじゃなかったの、あろう、結局ね、田打ちっていうんですか、そういうのをやって《笑いながら》あろう、働いて、その金で足しにして、お花見をしたり…、

――よそのお宅さ…、

ええ、そうです。部落内のね。して、青年会の人たち、田打ちさ行くづつて、あのやっぱり頼まれたりしてね。ええ、して朝2時間やそこの時間で、働いたもんです。そしてそれで、花見したりね…。

――はい、それは青年会でっていうことでやったんですか。

はい。青年会ちゆう、…あの頃結構ねえ、今だと青年会ってないんですって。もう勤めにね。

――そうですね。

…みんな出てるので、青年会作ってもなかなか集まらないっていうんですけど、私らの頃はみんなうちにいたもんですからね。まず、青年会っても結構、20人かそこの会員がありましたので。

――はあ、

…その中から、毎年やっぱりね、会長さんとか、副会長さんとか、会計とかってね。決めて、そしてやっぱり、会を運営してね。で、そしてやっぱり花見とかなんたって…、ええ。

――なるほど、そうですか。

あ、ほんとその頃、ちょっと花見の前にね、青年会の

運動会つのもあったんですよ。…あの、湯本村、13部落あるんですけど、部落対抗だね。青年会の運動会なんてあって…。…やっぱり、それも楽しみのうちで、夜、ちょこっと仕事が終わって、夜、今度その前は、その今本田エレクトロン〈工場名〉になっているんですけど、前はもとの分校って、小学校があるんですよ。

——はあ、なるほど。

その、庭で練習したりね。で、結構、あのう、運動会っていえばみんなやっぱり、みんなで応援して、して、優勝、昔は私ら入る前は、優勝したりもしたんですって。んだけれども私らの頃は、あんまり、そういうこともなかったんですけど、でも、以外と、ねえ、みんなやっぱりこう、^{不明}ケツちゆうかなんか、走る人たちがいっぱいありましてね。一日楽しんで、あと、夕方になれば、あの今度部落に、あの頃は青年会館ってあったんですよ。そこへ帰ってきてから、今度みんな、あのう、なんていうの食事の支度したりして、慰労会みたいなことをやってね。…そうやってで、今度はほら、んじゃ、今度花見に行こうかなんて決めたりして、そしてそういうこと、結構楽しくええ、まとまってきましたねえ。あの頃の青年会はねえ。

【事例2】 Eさん（昭和15年生・女性）

昭和30年に中学校卒業後に会に入会。やくざ踊りも踊りながら青年演劇と生活記録、女性問題の討議等に積極的に参加し、市青協の役員も務めた。昭和37年に市青協で知り合った男性と結婚。以後は転勤生活を続ける。現在は夫の退職で花巻に戻り、市民運動と趣味に没頭している。

…そしてそのね、梶目の青年会っていうのは、当時は、テレビも何にもないでしょう、ラジオなんていったって、ほんとにまだ全国的にラジオなんて加入していない時ですから、すると楽しみってのは何にもないんです。そうすると、雨が降って、そして働かない、働けない日は、遊び日とかなんとかっていうのが出てくるんですよ。農家の中でね。そうするとやっぱり、若い人たちは、じゃあ、公民館に集まって、っていう感じ…がそもそもの青年会なんですよ。

——なるほど。

私のね、記憶からいえばね。また人によっては違う面もあるでしょうけれども…。本当にそういうふうにしなないと、あのう、娯楽っていうのが何にもなかったんですよ。

(5) 青年会の結合原理

これまで提示してきた【表1】と生活記録文、【事例1・2】の提示から筆者はそこからこの梶目青年会に集まった青年たちの結合原理は「娯楽」と「たまり場」への要求であり、日常生活とかけ離れた堅苦しい形式的な学習は本質的に受けられるものではなかったとの仮説を提示したい。

そして、梶目青年会では「やくざ踊り」に青春をかける層と、青年運動を流入させようとする政治青年たちとの葛藤、そしてその妥協としての青年演劇への取り組みの過程があったが、青年会活動に学習活動が根付くまでには至らなかったといえる。

つについては、「娯楽」の多様化もあり、また農作業のサイクルにあわせて企画されていた活動【表1】が、高校などへの進学と離農傾向によって、青年の生活サイクルと合致しなくなっていった。これによって必然的に事業・活動の縮小と会員数の減少がもたらされたのである。

4. おわりに

(1) 視点・方法の有効性と課題

それでは従来の研究の問題点に対して、それを克服する方法論の有効性を、前掲した梶目集落青年会の事例分析を通して論じたい。

まず、①として掲げた集落青年会の実態、②に掲げた結合原理と機能に関してであるが、これは主に農閑期と夜間に娯乐的な事業が行われていた実態、そしてその結合原理が本質的に娯楽集団・「たまり場」的なものであることを、④として掲げた当事者の視点から——すなわち生活記録文、青年会誌、そしてライフ・ヒストリーを用いて仮説提示できたといえる。

③における地域特性の軽視に関しては、当然、逆にその重視、すなわちモノグラフ調査によって機能主義的に事象を理解していく態度をとりたい。そしてここでの地域のスケールは集落単位である。

紙面の都合により詳細なデータ提示はできず、また地図も掲載できなかったが、梶目集落は同族結合が未だに伏流する同族型集落の典型ととらえられる。集落における青年会の機能はそもそもが祭礼の運営と道や用水路の維持などの集落のハードの維持にあったことがうかがわれる。それがゆえに青年会という名目で大人の介在しない一種の特別区としての「たまり場」的な性格を持ち得たと考えられる。

しかし、これはあくまでも一集落のモノグラフ調査

であるため、例えば岩手県に限ってみても、より強い同族結合を見せる地域、あるいは漁業を主たる生業とした集落、名子・被官などの隷属的小作関係が存在した集落などでの青年会活動とその結合原理の差異を、集落調査を通してより詳細な分析を加えていきたい。

(2) 戦後集落青年会の見直しとその可能性

これまで述べてきたように、従来の研究では娯楽・たまり場・居場所を結合原理とした集落青年会の意味を単純に否定してきたのではなかろうか。

社会教育での議論では、若者仲間や寝宿等での広義の教育機能を評価する。しかし、性の管理の問題や地域網羅的組織であるがために、参加が半強制されること、突出した個が抑え込まれる面を捨象し、美化されたモデルが一人歩きしている向きもある。

しかし、改めて各時代ごと、すなわち近世から近代初期まではいわゆる「若者組」が、そしてそれ以降は集落青年会が、集落の大人の規制、そしてその後の国家権力の規制が加わる中で、「たまり場」機能を本義として存在し続けたこと、そして戦後もある時期までその「たまり場」を集落青年会が機能として持ち続けたことが、通時的に意味づけられのではないかと考えている。

この問題を具体的に考える際、例えば宮坂広作(1960)の青年学級の実態の指摘は興味深い⁽³⁷⁾。宮坂によると、青年学級法制化の際のモデルである山形でも、法制化時点で既に事業が停滞化しており、初期青年学級にかぶさる「自主的」という形容が、「もともと青年たちが自発的に創出した青年学級を、県や国がとりあげて形式化した事実を強調するために、初期の自主性と共同性を過度に華想化した⁽³⁸⁾」ものとした。そして大人主導で、青年学校の焼き直しである「つまらない学級」を打破するために、共同学習論に活路が見いだされたとされる。矢口徹也(1990)も山形の初期青年学級の実態と性格を同様に指摘した⁽³⁹⁾。

宮坂も挙げているが、ここに村の官製青年学級が崩壊しても、集落の青年学級が機能していくという例がある。それが大田堯が関わり、評価した「ロハ台」の実践である。大田の報告からは、そこにたまり場、すなわち「楽しい場」「居心地のよい場所」としての意味づけが当事者からなされていたことがうかがわれる。そこを土台に日常生活における問題の再認識を、生活記録と演劇活動を通して集落の青年たちが行っていったのであった。

つまり、彼らにとっての学習というのは、形式的・

学校的な学習ではなく、フランクなたまり場の延長としてのものであったといえよう。前掲した柵目青年会の活動も同様にとらえられる。また、これが集落青年会における、また青年の日常態における学習の限界ともいえるのではなかろうか。この現場の実態を単純に否定してきたのは、研究者・青年運動の推進者に、一種の現場軽視の意識があったのかもしれない。

この「たまり場」的性格とある程度の「形式化」のいずれを強調するかは、社会教育の性格をどのようにとらえるかという根本の議論に発展しよう。主体性・自己教育といった言葉からこぼれ落ちるものに実は学びの本質がかいま見られるのかもしれないのである。

そしてこの視点を、戦後の農村を、そして日本を過ぎ去っていった近代の変革観を根底に持つ、様々な運動・ムーブメントにも当てはめてみたい。それらは果たして現実に即したものであったのだろうか、また、何を変えていったのであろうか。

その点に関して、筆者は今までに民俗学者宮本常一の変革論・リーダー論を評価してきた⁽⁴⁰⁾。それは、あくまでも「村の風」、すなわち「世間」を理解し、村の外と内側の境界にまたがった人物が、「世間」の範疇内で徐々にかつ確実に変革をしていく、というものである。同様の見解は鶴見和子の柳田國男論から導かれた「内発的発展論」と共通する部分があるともいえる。これをもし、伝統的変革論と呼ぶとするのなら、もう一度終戦直後からの日本の現状に、地についた実践のあり方を再考する必要がある。

さて、高度経済成長期を境に集落青年会、ひいては市町村の組織の消滅、活動の停滞化を迎え、たまり場としての集落青年会の機能は失われた。そして青年たちのたまり場は学校の中に、職場の中に、そしてサークルの中にとフォーマル・インフォーマル、規模の大小はありながらも存在し続けている。そして現在、その場所を見いだせない青少年への施設・機会提供が社会教育でも論じられてきているといえよう。

今回は一つの集落青年会の事例からの仮説提示であったが、特に戦後の集落青年会の本質的な結合原理としての「たまり場」的機能とその緩やかな規範、そしてある程度、社会的規範から逸脱することも許容されるような広義の人間形成機能の実態を、安易にモデル化せず現実の状況に即して検証していくことが必要である。そしてこの研究作業が、現在展開されている「たまり場・居場所」論を深化させていくのに寄与すると思われる。

今後は地域類型を念頭に置きながら、集落のモノグ

ラフ調査を行い、またライフ・ヒストリーによってその集落の戦後期における青年集団の日常的な機能や活動の個人の意味づけを見ていくだけでなく、人間形成における意味を検証していきたい⁽⁴⁾。

註

- (1) 戦後に各地で勃興する地域青年団が、主に集落単位の分団組織は「会」の名称を、市町村単位の組織を「団」の名称を採用していくことが多い。本稿では後述するように主に集落単位の青年集団に焦点化しており、以後特に断りなければ集落単位の組織は「集落青年会」と呼称し、また市町村単位の組織は「市町村青年団」と呼称する。また、本文中では集落を意味する「部落」は引用部でない限り、「集落」に統一している。
- (2) やくざ踊りとは、当時の流行歌のレコードに合わせて手踊りや組おどりをするものであった。詳細は拙稿1998a「戦後農村における集落青年会の消長—岩手県花巻市栢目集落の事例を通して—」(『高度経済成長と民俗の変化—東日本の民俗社会における民俗の変容と生成— 文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書』)を参照されたいが、股旅もの(道中もの)、マドロスものといったジャンルがあった。民謡も踊られ、多くは組踊りがなされた。本文中にも後述するように主に終戦直後に全国的に爆発的に流行した。
- (3) 藤田秀雄 1978『社会教育の歴史と課題』学苑社、藤田秀雄・大串隆吉編著1984『日本社会教育史』エイデル研究所など。
- (4) 高橋啓吾編1962『青年演劇運動史』岩手県教育委員会、拙稿*2前掲報告〔1998〕など。
- (5) 1950年代より社会教育を歴史的に意味づけていく研究が散見されていくが、上野景三1992「占領期社会教育研究の現況と課題」(佐賀大学教育学部・教育学研究室『教育学論叢』創刊号)、新海英行1999『現代社会教育の軌跡と展望』大学教育出版による社会教育史研究の概括をふまえると、近代からの社会教育思想・政策等を鳥瞰する体系的な社会教育史研究は1960代に始まるといえる。そして、具体的に戦後を対象とした社会教育史研究は1970年頃より取り組まれていく。
また、上野景三1996「青年教育史の課題と展望—青年集団史研究を中心に」(『日本教育史研究』15)は、戦後における青年集団史研究の関心が、主に近代に寄っていることの見通しを示してくれた。
- (6) 山口武秀1960『青年運動の理論』三一書房
- (7) 文脈によると青年団の「独自の役割」の意である。
- (8) 小川利夫1961「青年問題の現状と認識」(生活科学調査会編『青年教育』〔講座・日本の社会教育Ⅲ〕医師業出版) p. 9
- (9) 同上 p. 10
- (10) 佐藤信一1958『農村青年学級と小集団学習』(日本社会教育学会編『小集団学習』(日本の社会教育 第三集) 国土社 p. 92
- (11) 同 p. 93
- (12) 寒河江善秋1959『青年団論』北辰堂 pp. 76-82
- (13) 大田堯1957(初出1956)『日本の農村と教育』国土社 p. 266
- (14) 同 p. 266
- (15) 横山敏1978「戦後初期における農村青年集団の形成—ある稲作農村における学習内容と学習主体」(『日本社会教育学会紀要』14)
- (16) 寺中作雄1946『公民館の建設—新しい町村の文化施設』公民館協会
- (17) 長浜功1984『社会教育の思想と方法』明石書店(初出1980大原新出版社)
- (18) 最近でも90年代の青少年をめぐる言説をふまえつつ、社会教育学分野の研究者によって、田中治彦編著による『子ども・若者の居場所』(2001学陽書房)が出版されている。これらの動きからも改めてかつての集落青年会での「たまり場」的機能の再検討が行われるべきと思われる。また、この「たまり場・居場所」に関して修士論文で取り組んでいる、上田一成君の教唆を受けた。
- (19) 佐藤守1969『近代日本青年集団史研究』お茶の水書房
- (20) 江馬成也1971「山村社会の変容と若者組織—「鋤柄講契約」の事例を通して—」(村落社会研究会編『村落社会研究』7 塙書房)
- (21) 藤田秀雄は、島村に駐在したときの経験から、やくざ踊りのもつ娯楽性が集落において求められることを認識した見解を述べ、一定の評価を与えている。(藤田 1958「青年団における小集団学習の問題点」日本社会教育学会編『小集団学習』(日本の社会教育 第3集 国土社)、藤田前掲〔1978〕。
- (22) 高木護編1978『やくざ踊り戦後の青春1』(たいまつ新書33)たいまつ社。これは、野添憲治をはじめとした10名の農民作家・詩人が手記を寄せたものである。
- (23) 古茂田・島田・矢沢・横沢編1994『新版 日本流

- 行歌史】上巻 社会思想社 p. 114
- (24) 「若者組」や「若衆組」はあくまでも学術用語であり、岩田重則は「ムラの若者・くのにの若者民俗と国民統合】(1996 未來社)において、それを①若者中…定型的な組織 ②若者仲間…若者の自由な集まり。宿を持ち、娘を管理しつつ夜這い、婚姻媒介を行う ③若者奉公人…年季奉公等の若者に類型化した。特に、教育学で理想化されているのは②のようであるが、そこに性の管理の問題があることを無視してはいけない。
- (25) 平山和彦1978『合本青年集団史研究序説』新泉社、岩田*24前掲書参照。
- (26) 年齢階梯制原理に基づいた年齢集団としての青年集団の研究の見通しは、高橋統一の「年齢集団」(1977『日本人の社会』(講座・比較文化6)研究社)、「年齢階梯制」「年齢集団」(『文化人類学事典』1987 弘文堂)の整理が簡明である。
- (27) 拙稿2001「日本におけるライフ・ヒストリー導入の過程とその記述法の概観——宮本常一と中野卓の業績を起点に——」(『岩手の民俗』11投稿中)を参照されたい。
- (28) 事例に関しては、拙稿1998a「戦後農村における集落青年会の消長—岩手県花巻市柵目集落の事例を通して—」(『高度経済成長と民俗の変化—東日本の民俗社会における民俗の変容と生成—文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書』において一部報告した。その際に割愛したライフ・ヒストリーの記述、生活記録文の記述を加えて再構成した。
- (29) 柵目の郷土史家であった故吉田久助氏の遺稿による。
- (30) 三田憲編1920『湯本村史』p.57
- (31) 資料と証言から、昭和20年説と21年説があるが、復員の状況から21年が妥当かと思われる。
- (32) 「みんなとともに」(『岩手の保健』43 1956)
- (33) 昭和30年度柵目青年会誌『つどい』(1955)より引用。
- (34) 花巻市青協『べごっこ』(1957)より引用。
- (35) 池野正明(1918~1965)。昭和32年より岩手県教育庁社会教育課社会教育主事に就任し、以後「池野理論」と呼ばれる青年運動理論を以て県青年運動に多大な影響を与えた。「青年団体構造改革」(1960)では、従来の青年運動が机上の空論に終始しがちな、学習した後に実践という「学習的実践活動」であったことを批判し、学びつつ実践活動を行う「実践的学習活動」への転換を主張した。昭和40(1965)年に急逝したが、死後遺稿集『永遠の無理数』が昭和42(1967)年に刊行されたことからそれだけのインパクトを持ち合わせた人物であったことがうかがわれる。また詳しくは稿を改めて示したい。
- (36) 池野正明が岩手日報昭和34年10月7日夕刊で「青年演劇の疑問に答える」で示した見解。この時期は青年演劇の性格論争が行われていた時期で、以後の共通見解となっていくた。
- (37) 宮坂広作1960「青年学級の変容過程」(宮原誠編『青年の学習』国土社)
- (38) 同上 p. 121
- (39) 矢口徹也1990「戦後初期青年学級の研究—山形県を事例として—」(『日本社会教育学会紀要』No26)
- (40) 拙稿1998b「忘れられぬ日本人——宮本常一の地域リーダーへの視点——」(筑波大学歴史・人類学系民俗学教室「『宮本常一』論」)、2001「日本におけるライフ・ヒストリー導入の過程とその記述法の概観——宮本常一と中野卓の業績を起点に——」(『岩手の民俗』11投稿中)
- (41) 今回提示したライフ・ヒストリーの記述は、あくまでも各々のライフ・ヒストリーの断片であり、これはライフ・ストーリー、あるいはオーラル・ヒストリーの一部である。今回は触れなかったライフ・ヒストリーの基本的概念に関しては稿を改めて提示したい。

The True Aspects and Functions of the Youth Age Groups in the Village : Issues of Historical Studies of Community Youth Age Groups in the Postwar Period and Prospects on the Method of Life History

Koki Ando

The purpose of this paper is to propound issues of historical studies of community youth age groups in the postwar period and to advance a new methodology using a method of life history to overcome their issues.

Although a large number of studies have been made on the community youth groups in the postwar period, little attention has been given to the true aspects and function of the youth age groups in the village from youth's viewpoint.

The question is that the true principle of combination of the youth age groups is not clear.

So, what I wish is to show the true principle of them using a method of life history.

The contents of this paper are as follows;

- 1 . Intoroduction
- 2 . Issues of historical studies of community youth age groups in the postwar period
- 3 . The true aspects and functions of the youth age groups in the village: In the case of "Kunuginome Seinenkai" using the method of life hisitory
- 4 . Conclusion